

---

# 転生者のハンターライフ【習作】

ままDoLL

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生者のハンターライフ【習作】

### 【著者名】

ZZード

Z5351Z

ままD○L

### 【あらすじ】

滑つて転んであら不思議。

これはHUNTER×HUNTERの世界へと転生してしまった一人の男の物語。

## プロローグ

Web小説。

なかでも一次小説とよばれる物でよく扱われるジャンルに、転生モノといつジャンルがある。

まあ、知っている人は知っているし、知らない人は全く知らない。多分そんなものだ。

「うばーーあばばばーー！」

世間一般で言うオタクそのものであり、アニメ・漫画の原作だけでは飽きたらず、ネット上で一次小説を山ほど漁つて読んでいた俺にとつてはなじみ深いもの。

転生。

「あふふー……

俺にとって、転生とはまさに夢。

子供の頃ああしておけば……、あの時いつしておけば……なんて後悔は、腐るほどある。

もう一度生まれ変わって、全てをやり直したい。

あわよくば、こんな現実は捨てて、漫画やアニメなどファンタジーな世界で、おもしろおかしく生きてみたい。

そんな後悔や妄想が腐つて、発酵して、得体の知れないネバネバとしたナニかを体から噴出しまくっているのが、俺だ。

「うふふふ……」

いや、俺だった。

「うほほほ……」

何故俺がこんなこんな思考をしているのかとこいつと…。まあネット上の諸兄ならば、もう察しが付いているだろ。

どうやら、俺は転生してしまったらしいのだ。

わーいやったね。

アパートの階段から降つよつとして、足を滑り出で…そのままお陀仏。

コンクリートに打ち付けた頭から何やら、どうとした脳味噌的

なモノが流れ出たのを感じたと思つたら、何かを考える前にそのまま意識を失つて、気が付けば。

「「うふう……」

赤ちゃんに生まれ変わっていた。

まあ痛いやら怖いやら感じる前に死ぬことができたっぽいのはツキーだったと、今考えればそう思つ。

痛いの嫌だし。

生まれ変わったといつても、自分の体が赤ちゃんになつてこると気が付いたのが、ついさつとき。

余りに理解不能な状況に混乱したり、半端じゃないほどの体の違和感に戸惑つたりしたが。

とにかく今は。

「あふふふあ――――――」

「の状況を何とかして貰うのが先だ。

元気に声を上げる赤ん坊の俺を、笑顔で見詰める両親？そんなものはどこにも居ません。

気が付いたときには巨大な門のような木製の和風な扉の前で、絶賛『放置中』。

毛布に包まれてカゴのような物の中に寝かされていい俺の目の前にある空からは、しぶしぶと音もなく降り続ける雪。

……捨て子ですね。分かります。

100

つてアホか！？死ぬ！死んでしまう！

転生した瞬間捨て子でしかも死の危険とか、どんだけですか——

!

誰か助けて！助けて下さい！

誰かに気が付いて貰おうと叫び続けるが……。

「あぶ……一ぶう……」

眠くなつてきました。はい。オワタ。

この動きもせず、数分で眠くなる赤ん坊の体が憎い……。

寒くて体は勝手に震えるし……『ダメだ！寝たら死ぬぞー』をこの形で経験する……にならうとは……。

こんな転生ならしない方がまだマシだったな……。

「あぶうあ

あ、もひ……

「……。」

ダメっぽい……

τ  
z  
z  
z  
...

俺はラスク。この世界に生まれて今年で3歳になった。

そう。俺は転生していきなり捨て子スタートといつ試練を乗り越えた、あの赤ん坊である。

結論から言えば、俺は助かった。

寝てしまつた後しばらくして、運良く拾つて貰えたのだ。

聞けば、俺は数日生死の境目を彷徨つたようだ……。

毛布にくるまれていたとはい、あんな雪の寒空の中に数時間放置されていたので当たり前なのだが。

拾われた時にはもう殆ど死んでいるような状態で、何とか一命を取り留めたといつ。

そのとき俺を救つてくれたモノといつのが……。

まあ、そのことについてはまた後で。

俺も今年で精神年齢28歳。まあ何とか元気でやつてます。

そんな俺の目の前で今、一つの戦いが繰り広げられている。

「ふんツーはツー・ビツヤ————！」

「ほつー・よつー・ととと。  
やのう」  
フォツフォツフォ。まだまだじ

「押忍ツー！ てりや————！」

広い道場。そしてその広い道場の中にひしめき合つ肉、肉、肉。

むさ苦しい溢れんばかりの筋肉達に囲まれて、一人の老人と男性  
が戦っている。

実際は戦っているというより、老人は遊んでいるといった感じで  
全力で殴りかかっている男を軽くいなしているのだが。

「フォツフォ

男が繰り出す拳の連撃を笑いながらかわし続ける老人。

「そもそも終わりにするぞい」

「押忍！ ！」

「ふん！」

ドガアンー！

老人の一突き。

まるで力を入れているようには感じられないその右拳の一撃で、男は吹き飛び壁に叩き付けられた。

老人が、自分よりも一回りも大きい筋肉質の男を吹き飛ばすというこの光景。

転生する前の俺ならば驚いたかも知れないが、もつ何度も田の当たりにして、流石に慣れてしまった。

「これからも精進することじやな

「ぐつ……。お、押忍……有難う、御座い……ました……」

「今日はここまでかのう？　　おーい、ラスクーそろそろ帰るぞい！」

「はーい

こつちに向かって歩いてくる老人はあれだけ動き回っていたのにも関わらず、汗一つかいていない。

高齢による肉体の衰えなど全く感じさせないこの老人こそが、捨て子だった俺を拾ってくれた命の恩人。

名をネテロという。

そう。俺が転生した世界。それはHUNTER×HUNTERの世界だったのだ！

何度も読んだあの有名な漫画。アニメにもなったあの世界に転生したのだ！

死にかけていた俺を救つたのが、念。

あの雪の日。

死にかけている俺を見つけたネテロが、ハンター協会専属の念医師なるものをすぐに呼んでくれたおかげで何とか一命を取り留めたのだ。

『ネテロ』、『ハンター協会』、そして、『念』。

それを知った時、俺は狂喜乱舞した。

魅力的なキャラクター。ハンターという優遇されまくった職業。

それに加えて、念能力！何度自分の念能力を妄想したか分からない。

その魅力的な空想の世界に、今俺は生きているのだ！と。

だが、次の瞬間には絶望した。

どうせならもっと違う世界に生まれたかった、と。

だつてそうだらう？

物語の主要な登場人物も、時には何の罪も関係もない通りすがりの一般人まで、ぽんぽん死んでいく。

人の命なんて『ミクズほど』の価値もない。

それがHUNTER×HUNTERという世界なのだから。

実際に俺を拾ってくれたネテロも、キメラアントとの戦いで自爆して命を落としたのだ。

原作に登場しない転生者の俺なんて、いつ死ぬのかわかつたもんじゃない。

しかし幸いにも、俺はネテロとこのこの世界屈指の実力者に捨て貰うことが出来た。

一生誰かに守つて貰つてもつはない。

そんな他人任せで生きていける程、この世界は甘くない。

自分の身は自分で守らなくてはならない。

せつかくHUNTER×HUNTERの世界に転生したのだから、原作には積極的に介入したい。

そのためには、建ちまくる死亡フラグをぶち折るだけの力が必要になる。

赤ん坊の俺なら、これから幾らでも強くなれる機会があるはずだ。そう考えて、いくらか気持ちを持ち直したものの、赤ん坊の俺では出来る事に限りがあった。

なんとか情報収集をするのが閑の山だった。

そんなこんなで、転生してから既に3年が経過してしまった。

調べが付いたのは今は1985年だということ。

そして、原作開始（ゴンがくじら島から旅立つ年）が1999年。これは漫画を何度も読み返したから憶えていた。

つまり原作開始は14年後。その時に俺は17歳になつている。

14年必死に修行して念能力を会得すれば、最低限ハンター試験

でヒソカに殺されずに済むべりこには強くなれるんじゃないだらうか。

『有難う御座いました！！押忍！！』

心源流の門下生達の汗臭いお見送りの言葉を背に、俺とネテ口おじこちゃん（そう呼べと言われた）は道場を後にした。

育ての親の“一人”であり、心源流の師範であるネテ口おじこちゃんはたまにこいつして俺を道場に連れてくるのだ。

流石にまだ3歳なので鍛錬に参加させられるようなことはないが、そろそろこいつからお願いしようかなーと思つてこる。

孫煩惱のネテ口おじこちゃんは俺が心源流を習つたこと思つてみると知れば喜ぶだらう。

育ての親の“一人”といつて訳がある。

ネテ口おじこちゃんは俺を実の孫のよつに可愛がつてくれているが、流石にハンター協会の会長でもある彼は忙しいらしく、たびた

び世界中を飛び回っていた。

つい最近まで乳児だった俺は、当然誰かに面倒を見て貰わなければならなかつたので、そう言つ場合は人に預けられた。

その時その時で預ける人が違つため、俺の育ての親（自称）はどんどんと増えている。

そして、

「おいコラ！クソジジイ！！『あたしのラスク』をあんな汗臭い道場に連れて行くなつて何度言つたら分かるのかしら！？」

道場から出て少し歩いた所でいきなり現れ、ネテ口おじいちゃんに罵声を浴びせる少女。

俺の育ての親の一人。

「あ、ビスケだー！」

「久しぶりね～ラスク！」

俺が少女に駆け寄ると、彼女は自分のお腹あたりまでしかない俺の頭に手を載せて、ぐりぐりと撫でてくれた。

久しぶりって言つても、つい3日前まで一緒にいたんだけど…。

彼女の名前はビスケット＝クルーガー。

あの『トン』とキルアも師事した、作品ひとつもの美少女（？）であるビスケも俺を可愛がってくれているのだ。

何と云々ラッシュキーボーイ。

「ほつほつほ！　なあーに」が『あたしのラスク』じゃたわけ！…寒空の中、道場の門に捨てられておったラスクを拾つたのは儂じゃ！

「ふん！いつまで経つても名前の一つ決められないクソジジイの代わりに、その『ラスク』といつ名前を付けてあげたのは一体誰だとおもつていいわけ！？そもそもジジイは拾つたっていうだけで、その後ラスクを此処まで育てたのはあたしでしょうが！」

「儂の名前から取つて『テロル』といつ名前に一度決めたじゃろううが！」

「それじゃあラスクがテロリストみたいじゃないのよアーッ！」

「あーー……」

俺の声など聞こえないのか、『あやーあやー』と言ふ争う二人。

田の前で繰り広げられる見慣れた口げんかに、俺はため息をついた。

た。

俺を捨てた人間は、どうやら名前を付けるといふことさえ放棄したようで、俺を包んでいた毛布と籠以外は何の手がかりもなかつたらしい。

国際人民データ機構にもデータが無かつたと言つから、俺の両親は犯罪者か、もしくは流星街の住民か…。

まあ、顔も知らない両親とおぼしき人間のことなんて、米粒ほどの興味もない。

むしろ、捨ててくれて感謝しているぐらいだ。

今はこうして幸せに生きているのだから。

とにかく、名前も何もなかつた善の俺の、この『ラスク』という名前は、ビスケが言つていたとおり彼女が付けてくれた物だ。

ビスケと出会ったのはまだ0歳だった頃。

俺が一命を取り留めて間もない頃、たまたまビスケがネテロおじいちゃんを訪ねてきたときに出会つた。

赤ん坊の世話などしたことがないネテロおじいちゃんが、ただオロオロと困惑している様子を見るに見かねて、実際に俺を此処まで育てくれたのは殆どビスケだ。

原作を読んだだけでは分からぬビスケの隠された一面。

やはりビスケも一人の女性だったといふことか。

国際人民データ機構への国民番号の登録や生態データの登録等も、  
彼女が全てやってくれた。

母乳……ではなく、市販のミルクを貰ってくれたのも、おしめを  
かえてくれたのも全部ビスケ。

それはもう甲斐甲斐しく世話してくれた。

その甲斐あつて？ビスケは特別俺を可愛がる。

原作14年前なので、ビスケは既に大体40歳をすぎた位なのだが  
……。

既に念能力である魔法美容師を開発済みなのか、筋肉質の大女で  
はなく、可愛らしい少女の容姿をしている。

まあ、見た目はどうでも良いんだけどね。

ビスケは原作の中じゃかなり好きなキャラクターだったし。

こんな美少女に育てて貰えた俺は、かなりの幸せ者だろ？。

とにかく、こうして2人が俺を巡つて口げんかする（ときにはマジの殴り合いに発展する）のはいつものことなのだが、本人を目の前にして「捨てられていた」だとか「テロリスト」だと大聲で騒がないで欲しい……。

「 「 「 「 ……」 「 「

ああ……通行人の視線が痛い……。

「ラスク！！」

「わっ！」

口げんかが終わつたのか、ビスケはもの凄い勢いで俺に抱きつくと、俺の頭のてっぺんに柔らかい頬を当てて、スリスリとほおずりしてきた。

「ん……ラスク！……クンクン。よかつた！汗臭くないわ！  
今日もラスクは良い匂いだわさ～」

「うう。くすぐつたいよビスケ

「あ～～～！も～～～！なんであんたはこんなに可愛いのかしら……」

ビスケはそう言つと、体全体で力一杯俺を抱きしめた。

自分で言つのもアレだが、実際俺は幼い子供特有のかなり可愛らしい容姿をしている。

ふわふわと柔らかい金髪に、くりつとした大きな緑色の瞳。

幼いながらも整いまくった顔立ちは、将来は結構なイケメンになるだろうこと間違いない。

前世ではとても口では言い表せないほどのキモメンだったので……、多分その反動なんじゃないかと勝手に思つていてる。

つて……力一杯？

ギュウウウウウウウウッ！

「うぐう……ー?び、び、す……け……」

「（スリストリ）」

「ぐるじ、いいいー……は、はなじ……で……」

「（スリストリスリスリー）」

助けを求めるようにネテ口おじいちゃんの方に視線を向けるが、  
「うやら口ではビスケに敵わなかつたらしく（町中でおつぱじめる  
訳にもいかず）、道ばたにしゃがみこんで凹んでいる。

あ、豆の人ことネテロおじいちゃんの秘書のビーンズさんが来た。

なんだろう。

またネテ口おじいちゃんに仕事かな?

ああ、連れて行かれちゃつた

「び、びずけ もつ ダメ」

卷之三

俺はラスク。今年で3（28）歳になる転生者。

す。  
HUNTER×HUNTERの世界で、今日も元気に生きていま

「スリスリ……。うん、堪能した！つてラスク！？泡なんか吹いちゃつてどうしちゃつたのよさ！？ラスク~~~~！？」

多分……。

これは酷いキャラ崩壊。

時は1987年。原作開始12年前。

俺は5歳になつた。

前の世界だと、たぶん幼稚園の年中とか年長とか、その位かな。

この世界では幼稚園に通つてることひとつではなく、むっぱら通信教育だ。

いろんな人に預けられながらここまで育つってきたので、当然一定の街に留まつていてる訳じゃないから、それしか選択肢が無いとも言える。

別に不満はない。

むしろそつしてくれとネトロおじいちゃんに頼んだ。

貴重な幼少期を狭い幼稚園で過ごすなんて考えられない。

同世代の子供達とお遊戯したり、ままでしたり……？無理だ。

あれだけ夢見たファンタジー世界なのだ。

いろんな人に連れられて、世界のいろんな場所を見せて貰つ方が何倍も楽しいし、有意義だ。

それに俺には、原作介入という大きな目標があるので、そんなことをしている暇はない。

そういえば、原作で1987年と言えば、グリードアイランドが発売された年だ。

正直言えばかなり欲しかった。

ゲームその物も面白そうだし、後々バッテラ氏がゲーム本体にも凄い懸賞金をかけたりするし。

それに実際にG・Iを体験してみたといと前世では常々思つていた。  
しかし当然、5歳児の俺が手に入れられるようなモノでは無かつた……。

まずその価格からしてありえない。

58億ジエニー？しかも現金一括払い！？

アホか！

たしかに、あれだけのゲームを開発するのに幾ら金が掛かったのか想像も付かないが、ゲームソフト一本でそれは高すぎるでしょ？

多分だけど、『その程度の金を稼げないヤツはG・Iをプレイする資格がない』とかそういう意図なのだらう……。

毎年、育ての親たちからお年玉をもらつたりして、何とか「ソシ」を貯めた俺の貯金（既に前世の貯金額を大幅に上回っている）。

それをもつてしても……うん、無理！ まったく手が届きません。

しかも、100本という出荷台数にもかかわらず、欲しがる人が2万人以上とかどんな競争率だよ……。

物売るつていうレベルじゃねえぞ！ ？ オイ！

ネテ口おじいちゃん達の「ネで手に入れようと思えば手に入ったんだろうけど、流石にそこまでのわがままは言えない」ので諦めた。

更に強くなるためには良い修行場でもあつたんだろうけどね。G・I。

残念だけど、まあ仕方ないさ。

原作に突入すれば、プレイする機会はあつちからやつてくるだらう。多分。

そうそう。

更に強くなるためのこと言つたけど、今の俺は同年代の人間に比べたら、かなりイイ線いつてるんじゃないかと思つ。

残念ながら未だ念は教えて貰つていないけど、その分基礎となる体はかなりのモノになつてきた。

まあおれを鍛えてくれる人達全員がチートみたいなもんなので、当然と言えば当然なんだけど。

強くなるための修行は4歳になつた時から始めた。

本当ならもうすこし前から始めたかったのだが……。（やうでもしなければあの原作チート組に追いつけそうもない）

過保護すぎる親たちにとめられました、まる。

正直原作のイメージから、むしろ喜んで訓練してくれるような人達ばかりだと思っていたのだが、甘かった。

『つよくなりたい』『はんたーになりたい』『ぼくをきたえてほしい』と、当時3歳の俺が育ての親達に話したとき……。

すぐさまRSS会員全員が招集され、それはもう、信じられないほどの大騒ぎになつた。

俺は、会員の溺愛つぶり（中にはそつでもない人も居るけど）をナメていた。

R S S会とは、R<sup>ラスクを</sup>、S（健やかに）、S（育てるための）会。

俺の預かつてくれた人達で構成されている委員会のことだ。

なんのこっちゃ。

俺の知らない間に得体の知れない委員会が、いつの間にか出来ていた。

そうして始まつた緊急会議。

誰もが、俺の『つよくなつて、はんたーになりたい!』といつ考  
えに異論はないらしく、むしろ喜んでくれた。

しかし、ネテ口おじこちゃんを筆頭とした『大歓迎じゃー今すぐ  
始めるとするかの?』派。

そして、ビスケを筆頭とした『まだラスクには早すぎるわせー』  
派。

それに加えて、『一体誰がラスクに、どんな修行を付ける?』と  
いう問題。

意見がバラバラに別れ委員会は内部分裂を起こり、あーだこーだ  
と喧々囂々の議論が一昼夜ぶつ続けて行われ。

たまに拳や蹴り、念能力なんかも飛び出したりして……。

会議場となつたビル一つを修復不可能なまでに粉々にぶち壊して、  
……よひやく緊急会議が終わりを告げた。

その光景を田の当たりにしていた俺はガクガクと震えているだけ  
だったのだが……。

会議の末、服や体の至る所がボロボロになつた育ての親達が、失  
禁してちよつぴり濡れた股間部分を必死に隠す俺に向かつて告げた  
のは、

『4歳になつたらラスクに修行をつけるー全員でー。』

と言つものだった。

たつたそれだけを決めるのに建物一つ倒壊させる自分の育ての親  
達の非常識さを田の当たりにして、今更ながらビックリしていた  
俺だったのだが……。

それと同時に、前世と違つて『俺はこんなにも愛されているんだ』  
と言つことが分かつたりして、正直かなり嬉しかつた……！

あ、ちなみにぶつ壊したビルは、ネテロおじいちゃんが代表で弁  
償しました。

死傷者が出なくて良かったよ、本当に。

そんなこんながあつて、俺が4歳になつたと同時にようやく修行が始まった。

自分から言い出したものの、どんな無茶な修行をさせられるのかと戦々恐々としていたのだが……。

まずは土台となる基礎的な鍛錬から始めるといつ事に落ち着いたので正直ホッとした。

修行はとてもなく厳しいモノだった。

ただし、前世の俺が同じ事をしたとしたら、だ。

転生した俺にとって、修行の日々とは本当に楽しくて、毎日がとても充実したモノだった。

なにせ、日に日に自分が成長していくのが、まさに手に取るよう分かるのだ。

修行を始めた頃はたつたの1回でくとくとなつていた腕立て伏せも、次の日には3~4回も出来るようになつていてる。

流石はハンターワールド。

誰が言つたか、『HUNTER×HUNTERの世界の空氣はプロテインが含まれている』前世のネットでいつだつたか見聞きした気がする。

どうやらそればマジだつたらしい。

別に急激に筋肉が付いてマツチヨな5歳児になっちゃつた……なんて、そんな不気味な現象は起こらない。

しかし、年相応の体と筋肉しか付かないのにどんどんと出来る事が増えていくのだ。

今現在、俺の見た目は明らかに5歳児相応のだが、既に腕立て腹筋それぞれ1万回を数セツトこなすのは余裕だし、短距離走でも長距離走でも前の世界の世界記録を易々と塗り替えられるだらう。

たつた1年の修行でコレだ。

我が事ながら、ありえない……。

ファンタジー世界に生きているんだともう一度実感しました、俺。

しかし、修行を見ていてくれる親達は、物凄いスピードで成長していく俺を見て一様に驚きの表情を浮かべた。

どうやら、この世界の誰もが俺みたいな体じやないらしく……俺は明らかに特別で、異常らしいです。

なんだだろ、俺が転生者つて事が関係してるのかな?魂のナンチヤラがウンヌンカンヌン……?しらんけど。

まあとにかく、転生した俺に何も『』えてはくれなかつた生みの親。  
しかし俺を捨てたその両親は、どうやら特別な体だけは『』えてくれたらしい。

その一点には感謝しないでもない。

この分ならもうすぐ念の修行に入れるだらうとのこと。

嬉しい！嬉しいすぎる。

一体俺は、何系なんだろ？強化系？具現化系？もしかしたら特質系かもしけない！

うう考えるだけでワクワクしていく。

そんなんこんなで、俺ことラスクは5歳になった。

愛すべき育ての親達に囲まれながら、今はただひたすら修行の毎日です。

がんばるーーー！



とある山奥にある、心源流拳法の修練場。

「3……2……1……ゼロ……ナーマドリフ……」

「…………っ！…………、ふはーーーっ……よっしゃー終わったー！  
あーつかれた……」

服が汚れるのも氣にとめずその場で床にぶつ倒れたのは、俺。

3時間全力で練を維持するといつも目標をよつやく達成した！

……流石にもう疲労困憊だ。

「お疲れ様だわさ、ラスク。ようやくここまで来たわね。上出来よー……ほらほら、そんなところに寝転がらない！」

そんな俺を見守っていた少女、ビスケが怒るが、さすがにもう無理……。

オーラがすっからかんで、もう一人いつも体が動きません。

「お疲れ様です。ラスク君。」

両手にタオルとドリンクを持ってくれたのは、兄弟子のウイング先輩。

ウイング先輩は俺よりも前にビスケの弟子になつていて、現在心源流拳法師範代を目指して修行中。

なのだが、将来はビスケのよう人に人を育てるということをしたいようで『私の修行にもなりますから』と、もつぱら俺の修行をサポートしてくれている。

ウイング先輩は今年で22歳になるといつに、寝グセや服の着方がだらしないのがいつに直らない。

それを見られるたびに、ビスケに引つぱたかれているウイング先輩。

そそつかしいが、弟弟子である俺に優しくしてくれ、いいお兄ちゃんのような存在だ。

「それにしても、君には本当に驚かされます。君のような少年がこんなにも早く、念を修めるとほ

「ありがとウイング先輩……。ビスケもつ無理ーーうーごーけーなーいー！」

「全く……。じょうがないわねえ……」

そう言いつつも、ビスケは魔法美容師まじかるエステを発動させ、桃色吐息ピアノマッサージをしてくれる。

修行の時は鬼のように厳しいが、やつぱりなんだかんだ言つてもビスケも優しいのだ。

厳しくも楽しかったこの3人での修行も、遂に終わりを迎えるといつのはまよっぴり寂しい気がするな。

今は1992年、原作開始の7年前だ。

俺が念の修行を初めてから4年たつた。

それと平行するように心源流拳法を習い始めて、もう4年の甲斐が過ぎたのか……。

早いモノで、俺は今年で10歳になりました。

身長もぐんぐん伸びて、既にビスケ（少女形態）と同じ位の高さになつた。

顔の方も段々とだが幼さが抜けてきて、順調にイケメン化してきています。わーい。

『念を修めれば常人よりはるかに若さを保てる』と云つことは、成長は止まり俺はずつと6歳児の姿のままなのか…?と、これだけが心配だったのだが。

どうやら杞憂であつたようである。

今まさに成長期の真っ最中なので、ビスケを見下ろす位の身長になるのもそろそろ遠くはないだろう。

基礎となる体づくりの修行が一段落付いたのが、俺が6歳の時。俺はようやく念修行が始まると喜んだのだが、そこで浮上したのが『誰がラスクに念修行をつけるか』と言つ問題。

全く念を扱うことが出来ないシロウトの俺に念を教えるのは、今までのようになっての親達がそれぞれが好き勝手修行を付けるよりも、誰かが付きつきりで修行を見た方が効率が良く、また確実らしく。

またもや開かれたRSS会の緊急会議の末、俺の念の修行に関してはビスケが一任されることになつた。

心源流師範代として何人の弟子を育て上げたその実績もさることながら、念能力者としても達人と言えるビスケならば、と皆が納得した。

……まあRSS会員の全員が納得するまでの過程で、またもや一つの建築物が倒壊したのは言つまでもない。

とにかく俺は、この4年で四大行と応用技を一通り習得して、ついに練の持続時間が目標である3時間に達し、心源流拳法も一通りの基礎を身につけた。

『後はひたすら実戦経験を積みながら更なる高みを目指して修行に励むこと』とはビスケの言。

12歳のゴンやキルアが今の俺の練と同じレベルに達するまで、天空闘技場で念を知つてから、キメラアントに挑む前位だから……。

確かその間、約1年だったと思つ……。

……つまり、俺はその4倍の時間が掛かつた計算になる。

10歳でここまで来た俺も十分異常なのだが、ホント二バケモノデスネ……アノコタチ……。

まあ、原作が始まると後7年もあるんだ。

俺は俺で、気長にやつてこいつ。

とりあえずの目標を達成した俺は、4年もの間お世話になつたビスケ達に別れを告げ、一足先に山奥の修練場を後することにした。

2人とも名残惜しそうだつたが、ビスケはここに残り、ワイング先輩が師範代になるための最後の仕上げをしていくらしい。

頑張れワイング先輩！ズシがあなたを待つてるぞ！

別に今生の別れでもなんでもないのに、目を潤ませるビスケにつけられて、不覚にも俺までうるつときてしまつた。

昔と同じように俺を抱きしめて、今度は俺の髪ではなく頬にすりすりと頬ずりをするビスケ。

そして、それを微笑ましい物を見るような笑顔で見詰めるワイング先輩。

照れくさくなつて、挨拶もそこに山を下りた俺の背中に向かつて、2人はいつまでも手を振り続けていた。

このままビスケやワイングと一緒に修行を続けてもいいのだが、実はこの4年間ほとんど他の育ての親達に会つていない。

たまに修練場を覗きに来た人もいたのだが、ビスケが「修行の邪魔だわさー！」と追い返していたのだ。

そのかわりビスケによつて、俺の修行風景を写した写真が一枚500ジエニーで希望者達に配られたらしい。

……って、カネ取ったのかよー？そしていつの間に撮った！？

……まあとにかく、そろそろみんなに顔を見せておかないとね。

俺はこんなに強くなつたんだぞーーとこつのも報告したいし、みんなと久しぶりに会えるのは楽しみだ。

誰かのハントと一緒に連れて行って貰つて、お手伝いとこつちの実戦経験を積むのもイイだらうし……。

天空闘技場にでも行って、ついでにお金を稼ぐのもいいかもしないな。

となれば早速、まず最初にネテロおじこちゃんの所に行くところか。

早速ビーンズさんに電話して、飛行船を手配して貰おう。

俺はラスク。今年で10歳になつた転生者。

今日も元気に生きています！

### 第3話（後書き）

主人公の念系統はまだ秘密ということです。

……実はまだ考えていないだけだつたり＼（^○^）／

## 第4話（前書き）

このへんから少し話の展開が遅くなる予定です。

### 注意

ジャンプを読まず、『ニニシクスだけを買って読んでいる方、ごめんなさい。

ラスクの育ての親達についての話に、単行本（～29巻）に収録されてないネタバレが入っています。

と言つてもチラシと、殆ど名前だけですが……。

それも嫌だという方は、申し訳ありませんが、該当部分（116行目辺り）と、後書きを飛ばして下さい。

山奥の修練場を後にした俺が、早速ビーンズさんが手配してくれた飛行船に乗り込んで数時間。

ようやく長い空の旅が終わり、ハンター協会本部に着いた。

顔パスで入り口を通して（俺がネテ口おじいちゃんの関係者だというのは協会本部の警備員も知っている）、エレベーターに乗り込む。

田指すは協会本部ビルの最上階にある部屋。

エレベーターから降りて、近くのドアを開けて部屋に入ると、ネテ口おじいちゃんが畳部屋の真ん中に座つて茶を飲んでいた。

「おおー帰ったかラスク！」

「ただいまネテ口おじいちゃんー！」

俺が来た気配には当然気が付いていたはずなのに、まるで知らなかつたという風に驚いてくれる。

湯飲みを置いて、俺を笑顔で迎えてくれるネテ口おじいちゃん。

その後ろには、彼が自分で描いた、黒地に白く『心』と書いてある巨大な筆字が飾られている。

達筆ですね～。

巨大な『心』の額の直ぐ隣に、俺が正拳突きをしてくる『真が飾られているのは……まあ見なかつたことにじよつ……。

この部屋は主にプライベートで茶を飲んだり親しい友人と話したりするための部屋で、ネテロおじいちゃんの和風趣味が多大に反映された一室だ。

……そして、原作でネテロおじいちゃんの遺言が撮影されたのもこの部屋。

「フオッフオ……。それにしても、大きくなつたの〜……

「……まあね！俺ももう10歳だし〜」

畳に座つたまま、しげしげと俺の体を眺めるネテロおじいちゃん。

俺が大人になるまでは、なんとか長生きしてほしいものだが……。

まあ、キメラアントのHとの一戦で自爆することができれば、そのがりいは長生きしそうだけね。

余裕で。

「どれどれ……」

「？」

そう言って立ち上がったネテロおじいちゃん。

次の瞬間。

「ふんっ！」

一瞬でその姿が俺の視界から消えたかと思つと、背後からもの凄いスピードの正拳が飛んできた！

「わあっー！ つととと……」

と同時に横に飛んで避けたものの、ブンッ！と音を立てて俺の脇の下を通過していく念の籠もった右拳。

あ、あぶね～……。

俺も結構強くなつたと思つてたんだけど……まあこ、間一髪だつた。

ほんとに一〇〇歳オーバーの『老人ですか?』と疑いたくなるが……。

まあそのあたりは、流石はネテロおじいちゃん。

立ち上がる瞬間、一瞬足に集まつたオーラを見破れたから良かつたものの……。

その威力の正拳をまともに喰らつていいたら……吹つ飛んでそのまま壁をぶち破つて、ビルからアイキャンフライするとこりだつたよ?

「ほお~今のを躱せるよくなつたか……。ふむ……。どうやら、ビスケに任せて正解だつたようじやの」

「イキナリあぶないじやんか……。ギリギリ避けられたからいいけじやー!」

「フォツフォツフォ

「まつたくもつ……。それでー? ビツー? おれもけつこう強くなつたでしょ!」

「ふん。今のはワシの全力の一割ほどじやーまだまだ甘い、と言いたい所じやが……。 その身に纏つオーラ。しつかり強くなつて帰つてきたよ! じやなーよくやつた、ラスク」

「よつしゃーーーサンキュー、ネテ口おじこりちゃんー！」

「！」の分ならワシと全力で組み手が出来る様になるのももつすべ  
かのう……」

「わすがにそれは、まだまだ先だつて……」

「フオシフオシフオー！」

腰に手を当てて大きな笑い声をあげるネテ口おじこりちゃん。

「」の元気な笑い声を聞くと、帰ってきたんだなあ～って氣になる  
ね。

「それで？ビビリやつた、楽しみにしていた念の修行の方は？順  
調に進んだかの？」

「うん！いちお一四大行と応用技を一通り修めて、練は目標の3  
時間を達成したから……」

「ほうーそれでは、後は実戦で経験を積みながら……といった所か  
の？」

「うん、ビスケにもそう言われたよ

「そつかそつか……。あとにかくせつかく久しぶりに会つたん  
じや。ゆつくりして行きなさい」

「はーこ

「ハーハーハとあいじらげを撫でながらさう言って、ネテロおじこちゃんは再び畳に腰を下ろした。

俺はネテロおじこちゃんの正面に座って、淹れて貰つた日本茶を飲みながら。

修行の日々の思い出や、俺が居なかつた間の他の育ての親達の話に花を咲かせた。

時間が経つのは早いモノで、あれやこれやと盛り上がりつつ、いつの間にか既に日が暮れてしまつていた。

……おつと、そうだった。

これからどうするかネテロおじこちゃんに相談しないとな。

「そうそう、ネテロおじいちゃん。実戦経験を積むための場所なんだけど、俺、天空闘技場に行こうかと思つてるんだ」

「ほつ？天空闘技場か……。それはまた……」

「それである程度経つたら、今度はみんなに頼んでハントに連れて行つて貰おうと思つてゐる」

「そりかそりか。皆喜んで連れて行くじゃろうな。しかし天空闘技場か……。今のラスクにはちと、物足りないんじゃなかのう？」

「そりなんだけど……。とりあえず自分がどこまで強くなつたか知りたいし。それにせつぱり先立つものは必要とこうか……」

「フォッフォー！金稼ぎか！それならば彼処はぴったりの場所じやな」

「うん！だから取り敢えず、みんなに顔を見たらすぐこでも行こうかなつて思つてゐんだ」

「ふむ……。4年もラスクに会えず、RSS会の皆寂しがつておつたしのう」

「俺も久しぶりにみんなに会いたいな」

「今は居らんが、サンジ力も、リンネも……。それに『十一支ん』の連中も大分寂しがつておつたぞ。ジンとパリストン以外じゃが

「ははは……」

まあ、あの人達はね……。

そもそも、一度も預けられたことがないし、それで良かったと思つてゐる。

ジンに預けられたたりした日には、幾ら命があつても足りないような気がするしね……。

いや、気がする感じなくて、絶対足りないなーうん!

どつかの山奥にムリヤリ連れて行かれて、魔獣を釣るHサとかにそれそりだし……。

パリストンは性格もアレだが……なんかイケメン過ぎてむかつく。

あのムダに白い歯とか。

「それじゃあ早速RSS会員に招集を掛けるとするかの……」

「お願いします」

「うむ。世界中に散らばつてゐるあやつらのひとじゅう。集まるまでしばらくかかるじゃね?」と丁かく今日はゆっくり休みなやー

「はーいー

ナウトヒーヒー、ネテロは部屋を出て行つた。

和風の畳部屋に残つたのは、俺一人。

田の前にあるお茶は既に冷めてしまった。

……うん、決めた。

今までそうだったけど、こつして久しぶりに会つて再確認した。

『ネテ口おじいちゃんがあんな自爆なんて形で死を迎えるなんて、俺は認めたくない』

俺はネテ口おじいちゃんが大好きだ。

ビスケも、他の育ての親達も……みんな。

だれも、絶対に、死なせたくない。

俺に前世の記憶があると。

この世界が前世で漫画になつていたと、話してみようか……？

そんなことはありえない、頭でも打つたのかと、そう言われる

だろうか。

いや……必死に説明すれば、みんななり信じてくれるだろう。

だが、万一信じてくれたとしても。

原作を知った誰かが、ネテ口おじいちゃんを引き留めようとしても。

ネテ口おじいちゃんは、自分が死ぬ未来が分かつたとして、その未来から逃げ出すような人だろうか……？

違う。そんなハズはない。

それは今まで育てて貰った俺が、だれよりも分かつている。

むしろ嬉々として、王に立ち向かうだろう。

そうなると……むしろ原作知識をみんなに教えることは逆効果になる。

本気になつたネテ口おじいちゃんをとめるのは、誰にも不可能だ。

例え今すぐ準備を始めたとして、ネテ口おじいちゃんは王を倒せるだろうか……？

……正直、想像できない。

それ程、王は圧倒的だった。

伸び代がある分だけ、未だ俺の方が王を倒せる可能性はある  
と、信じたいが……。

やはり難しいだろうか……？

でも、もう決めた。

決めてしまったんだ。

簡単にいかないのは分かってる。

俺は、絶対にネテロおじいちゃんを死なせない。

そのために、今、俺に出来る事は……。

## 第4話（後書き）

注意

は、「ネタバレ？私はいつこいつにかまわん」という人のための説明です。

『サンビカ（サンビカ＝ノートン）』  
ウィルスハンター（シングル）。ハンター協会の女医さん。美人（  
作者私見）  
ちなみに本作では、この人が捨てられて死にかけたラスクを救つたと言う設定。

『リンネ（リンネ＝オードブル）』  
グルメハンター（ダブル）。協会最年長のおばあちゃん。ネテロと  
違つてヨボヨボ。

『十一支ん（ハンター十一支ん）』  
ネテロ会長がその実力を認めた十一人。

有事の際に協会の運営を託す他、ヒマな時遊び相手になつてもらつたりしていた。

それぞれにコードネーム（子、丑、寅、卯…）が渡され、会長に心酔するメンバーのほとんどはその名に合わせ、改名したりキャラ変するなど涙ぐましい努力をしているが、例外もいる。メンバー全員が星の称号を持っている。

ゴンの父親であるジンもそのメンバーである。

『パリストン（パリストン＝ヒル）』  
ハンター十一支んの子。<sup>ねずみ</sup>？ハンター（トリプル）。ハンター協会副

会長。

他のメンバーから大分嫌われてるっぽい。 実際嫌なヤツ（作者私見）

深夜、協会本部にあるネーネロおじいちゃんの部屋。

あれから、どうすればネーネロおじいちゃんを死なせないよつい出来ることか…。

今、俺に出来る事は何なのか、ずっとと考え続けている。

考え続けて…、いるんだけど…。

「うが――――！」

考えても、考えても！

どうしたら良いのか、さっぱり思い付かん！

プロハンターでもない俺じゃあ大した事は出来ないしなあ…。

俺じやなくて、みんなに頼んでキメラアントを探して貰うとして  
も、バルサ諸島近海やミテネ連邦を監視する体制を作つてもひつ  
しても。

かなりの理由や根拠が要るだろう…。

理由や根拠を説明する「は」は、やっぱり原作の事を話さなければならぬだろ。

でもやっぱりそれは…。

それに、そもそもそれでキメラアントの発生を食こむかられるのが分からぬ。

そうだ！

今からキメラアントを探して始末しちゃうか！？

そもそもキメラアントって、確か第一級隔離指定種だったよな。  
つまり…、何処かの国とか組織が厳重に隔離してゐて…。

なんでそんな危険な虫を駆除じゃなくて隔離なのか分からぬいけど…。

まあ第一級っていう位だからよりほど厳重に隔離されているはずで、そのキメラアントが逃げ出して突然変異したとは考えにくい。

つまり、この世界のどこかに未だ発見・隔離されてないキメラアントが居るかもしれないってことだ。

それを探すか？

……マジで？

前の世界では、アリは地球上に『1京匹』居るって言われてた。この世界でも同じようなモンだらうし、その『1京匹』のアリの中からキメラアント1種類だけを探す……？

……無理です！

……そう言つ念能力でもない限り！

……俺には無理だな。

やつぱり『王を産む前に女王を倒す』これだな！

女王はNG-L自治国に漂着して摂食交配を行つて巣を作つた。

打ち上げられた所をすぐに始末するにも、どうに漂着するか分からぬ以上待ち伏せは無理。

とすると『ンやキルアがG・エクリアする辺りでNG-Lに潜入して、女王が人間を喰うのを阻止するのがいいかもしねないな。

そうすれば、歸団長クラスの奴らも護衛軍も居ない内に倒すこと

が出来る！

でももし、俺が女王を倒せなくて逆にエサにされてしまつたら…  
…？

……「ああああああー！嫌だあああー！嫌すぎるー！」

もし俺が喰われたら一気にキメラアントの戦力が増しちゃうことになるし…。

……やつぱりカイト達か、もしくはポツクル・ポンズ達に同行するのが最良かなあ？

そうすれば、もしかしたら彼らの命も救うことが出来るかも知れない！

しかしその場合女王を倒すためには、女王を守るネフェルピートー や師団長等の強敵達を突破しなくちゃいけない…。

「うーむ……。

……うん、とにかくまずは修行だな！

女王を倒すにしてもなんにしても、俺が強くならなきゃ話になら

ない！

「よひしゃー…やつたるビー……と、その前に

長い時間考え込んでいたから、喉が渴いた。

時計を見てみると、もう既に深夜三時をまわっている。

湯飲みを手にとつて……つて、ありや？

ネテ口おじこちゃんが淹れてくれたお茶はもう全部飲んじやつたのか…。

ん~、急須には未だちょいひと残つてるな。

「ふう…」

しかし…

「こんな時のために、俺には『秘策』があるのだ！

今までやつてみた」とは無いけど多分イケルはず…

……まあ、アレを知っている人なら簡単に思い付く事だらうけどね。

「ふふふ……」

まずは、急須に残ったお茶を湯飲みに入れてしまつた。

そんでもって、両手を湯飲みにかざして……

「『練』……！」

すると、湯飲みの底に少しあしかなかつたお茶がドンドンとやの量を増し始めた。

そのまま練を続けると、あつとこつまにお茶が湯飲みこつぱこまで増えていく。

「おおうといふ……！」

お茶がこぼれる前に、湯飲みのロギロギつままで増やした所で練をとめる。

……おわかり頂けただろうか？

つまる所、俺は『強化系』だったのだ！

今行ったのは、能力者自身の念系統を判断するための『水見式』。

この水見式を強化系が行つた場合、水の量が変わる。

水が減ることもあるのかも知れないが、俺の場合は『コンヤウ』イング先輩と同じように増えるのだ。

つまり『秘策』といつのは、飲み物を増やすこと…

……うん、それだけです。

パームが「コーヒーを増やしていたから出来ると思つていたけど…

いつも上手く行くとはね。

前世で俺は、大好物の カ・コーラを水見式で増やしたいと何度も思つたことか！

まあ今はお茶だけビ……。

とにかく、早速飲んでみよう！

「んぐつんぐんぐ……」

おお～！飲める！飲める～！

やつぱつネテ口ぬじこぢやんの艶つた茶葉は絶品ですね！

あれだけ急須に放置してもこんなに美味しいんだから。

甘みがあつて……それでいて渋みがあつて……。

つてあれ……？

『甘み』？

ちゅうとお茶にしては甘みがないかコレ…？

「ブウ————ツ————つ！？な、な、な……！」

なんだこれ！？

何で…？ビハーハー！？

強化系つてただ水の量が変わるだけじゃ無かつたのか！？

最高級のお茶といつても流石に甘すぎるー！

つていうか、むしろこの味は……

「な、な、なんで……。  
なんじやあああああ！」

俺の絶叫が、深夜のハンター協会本部に響き渡った。

## 第5話（後書き）

とこうことで、主人公は強化系（？）にしました。

キメラアント対策について納得できない部分多々あると思います。  
それについては、強化系である主人公は「単純バカ」なのだ、とい  
うことでお願いします……。

散々考えた末、出てきた結論は結局「強くなる！」です。脳筋です。

むしろ作者の頭では、主人公に完璧なキメラアント対策をさせつつ  
原作に絡めさせる上手い展開が思いつきませんでした。  
大きな山場となるキメラアント戦を無くしてしまったのも勿体ないで  
すし……  
ごめんなさい。

一体どういう事なんだ？

俺は強化系じやなかつたのか！？

たしかにコーラは大好きだつたけどさあ……。

水を干しておこしてもシハラシハラ炭酸がないとねえ？

ん？……そこか！炭酸水を一リ六味にすれにしんしやん！

俺って頭よくね！？

つてそんなこと考へてる場合ぢやない！

今はとにかく……困った時は、ビスけえもん！

と言ひ詰で早速電話！

「……もしもし！ビスケ！？」

『 一体どこのごこち...こんな時間にあたしに電話かけて  
くれたホは.....』

「俺！俺だよ！」

……あたしを詐欺ろうなんて、随分命知らずなようね？』

「ちがう！俺！詐欺！ちがう！俺！ラスク！」

『ん～？ラスク～？ふあ～～あ。一体こんな時間にどうしたつていうのよれ……。夜更かしはお肌の天敵って言葉を知らないの？』

「知ってるけど...ジスケのお肌は今はもう良くて.....」

…  
へ  
え  
？

げ！ やばい！

思わずとんでもない」と口走ってしまった！

わざわざあんな能力、  
魔法美容師を作った位だ。  
まじかるエステ

ビスケのお肌に対する執着は尋常じやない。

…電話で良かつた。

面と向かつてたら、俺といえども本気でぶん殴られて、バラみた  
いに顔面メチャメチャにされてたかも知れない。……。

やばい……。

「「メンナサイー」「メンナサイーお肌関係あります……ビスケ  
のお肌は常に綺麗じやなくちやにけません！」

『ふうん……。　　拾いしたわねえ？ラ・ス・ク？』

「あ、あははは……。　　つて違う！俺が言いたいのは、えー  
つと、えーと……。そつーお茶がコーラになつたんだよー。」

『ハア？何ワケ分かんなこと言つてゐるの……。もしかして寝ぼ  
けてるんじゃないの？』

「違うんだつてーホントに！ホントにお茶が……ー。」

『はあー、まつたくもつ……。いいから落ち着いて、ひやんと始  
めから順に説明してみなさいな』

「う、うん。分かつた。えーと……」

俺はネテ口おじいちゃんが部屋を出て行つた所から順に、お茶が  
コーラ味になるまでの経緯をビスケに話した。

ビスケは慌てる俺を宥めつつ、時に上手く相打ちを入れてくれた。

その甲斐あつてか数分も経った所で、一言で終わるはずの事の経緯をよしやく説明し終えた。

「それで、飲んでみたらお茶が「コーラ味になつてたつていうワケ。

……ふう

『ふむ……』

「ビスケ、コレが一体どういつ事なのかわかる?」

『分からないわ。……そんな話聞いたこともないわね』

「そつかあ……」

『……でも分かつたこともあるわぞ』

「え?」

『水見式をした場合、強化系は水の量が増える。確かにラスクはお茶の量を増やした。これはいいわね?』

「うん……」

『それじゃあ味が変わったのは?水見式で水の味が変わるのは何だつたかしら?』

「確かに水の味が変わるのは……変化系?」

『そり。あんたがやつて水見式をした時 まあ水じゃなくで  
お茶だから『お茶見式』かしらね？ お茶の量と、水の味、両  
方に変化があつた。……つまり？』

「俺は『強化系』で……それに『変化系』でもある……ってこ  
と？」

『そりこりことになるわ。でもやつなると、『特質系』と言え  
なくもないわね……』

「特質系……？でも、そんな事つてあり得るの？」

『だから『聞いたこともない』と言つたのよ。2つの系統を持つ  
念能力者なんて、今まで全くね。修練を積む事によつてそれ  
に限りなく近づけることは出来るでしようけど、原則的に2種類の  
変化が水見式に現れる事はない。そう言つ意味で『特質系』と言つ  
ただけであつて、実際は2つの系統を備えているつてことなんでし  
ょうけどね。特質系なら他と全く違う変化が出るから』

「やつか……」

「そりやあそりだ。

ビスケが知らないといつのも無理はない。

原作の知識がある俺でさえ知らないんだから。

そういうえば似たような能力で、クラピカの絶対時間があつたつ。

まあアレもかなり特殊な例だと思うけど……。

俺の場合、絶対時間の発動条件である緋の田発動とその副作用がない代わりに……？

いや、待てよ？そもそも強化系100%、変化系100%だとは限らないよな。

両方を90%ずつ使えるって事かも知れないし……。

そうなるとただの器用貧乏になりそうだ……。

そういうえば俺、『放出系』が半端じゃないほど苦手なんだよなあ……。

放出系というか、体から離したオーラを扱うのが物凄くダメなのだ。

ゴンがやつていた「人差し指から念弾を放つ」と同じ修行をやつているんだが……。

そもそもオーラを体から切り離した状態で維持するのが難しい。

かなりの時間修行したというのに、俺の場合豆粒ほどの大きさのオーラを、10秒維持出来るか出来ないか。

ましてやそれを飛ばすなんて無理無理無理イ！

田標に当たる前に、つていうか指先から離して50cm位で消滅する。

放出系が苦手なのと関係あるのか分からぬけど、俺の円なんて殆ど練と同じようなモンだしね。

パーセンテージで示すなり……多分放出系20%とかカナ？ あはは……

おかしいと思つたよ。

変化系の系統別修行は強化系のそれ並に得意だし。

強化系なら放出系は80%發揮できるハズなのに。いくら修行しても、『んよりも上手く出来なかつた。

ある意味、バランス取れているんだろ？ けど……なんだかなあ。

『ラスク。…あんた自分で何か心当たりは無いの？』

しばらく俺の系統について考え込んでいたのかさつきまで黙つていたビスケが、急に質問を投げかけてきた。

「……心当たり……？」

「そ、そんなのあるわけないよ」

『本当に？……あんたが『捨て子』だった、と言つこと以外で何か無いかしら……？』

「うん……ネテ口おじいちゃんに捨て貰つてからは、ビスケも知つている通りだよ……？」

『……』

ビスケの沈黙が、痛い。

違うな……、ビスケに嘘をついたから、痛いんだ。

本当は、俺に心当たりがあるのだから。

俺が普通の念能力者と違う所。

クラピカと同じように、俺の特殊な部分。

普通の人間と違う所。

それは……元々この世界の人間じゃなかつた『転生者』だと言つ事。前世の記憶があるつていう事。

でも……。されば、今は未だ話せない。

『…………』

「…………」

『うう……』

「うん……。…………めんね、ビスケ」

『いいわ。深くは聞かない。』

でもねラスク。あたしはあなたを、大事な本当の息子のように思ってゐる。とにかくそれは忘れるんじゃないわさ』

「うめん……。」

『違うでしょ? ううう時はなんて言つんだつたかしら? あたしはちゃんと教えたはずよ?』

「うん。ありがと、ビスケ……」

『ううね、良くできました』

……勘の良いビスケのことだ。

この分だと何かは分からぬまでも、俺に何か秘密があるってこ

とは、もうどうして知っていたんだろうな……。

もしかしたら俺の育ての親達も、みんな気付いているのかも知れない。

でも今も、今まで、俺に何も聞かなかつた。

気付いてないフリをしてくれているんだろう。

せっぱり優しいな、ビスケも……みんな。

こいつかきつと話そう、全て。

「……」

『とにかく！ちゃんと調べてみないと詳しいことは分からぬけど、普通の念能力者が1系統しか極められないのに対して、ラスクは2つの系統を極めることが出来るかもしぬれない。これは物凄く大きなアドバンテージだわさ！』

「……うんー。」

『その分修行は難しい物になるでしょうね。』

——鬼を追う物は一鬼も得ず。普通の能力者が主に一つの的に重点を置いて修行する所を、あんたは2つの的を追いかけなければならぬ』

「2つの的……」

『でも、あんたはまだ10歳!』のまま頑張り続ければ、いつかは世界一の念能力者になるのも夢じゃないわさー!』

「うん……そうだよね! よつしゃああああー! 燃えてきたあーーーー!」

『今まで強化系をメインに系統別の修行をしていたけど、これからは変化系の修行も重点的に進行してみなさいな』

「了解しました!」

『ふふつ……。あ、そつそつ。ジジイから連絡來たけど、あたしはそつちに行けないからね。ひよつこウイングの面倒を見なくちゃいけないし』

「分かった。みんなに伝えておくね」

『そうしてちょいだい。本当は今すぐラスクの所に行きたいんだけど……。そうね……、RUSH会の皆の前で実際に水見式をして見せなさい。きつと詳しく述べてくれるでしょうし、相談に乗ってくれるバズよ』

「うん、そうしてみるー! ありがとウジスケ!」

『いいのよ、他ならぬラスクのことなんだから。まあたしの『お肌』の事については今度じっくり話しましょーかねえ? うふふふふふふ……』

『……ソレでハワタクシ、ソロソロ寝ルコトニシマス』

『まつたく……。それじゃあおやすみなさい、ラスク。  
そつそつ。じょじょと待ちなさい。もう一つだけ言わせて頂戴  
あ、

「ん? どうしたの?」

『あんた確かにまだ『発』考えてなかつたわよね？』

「うん。強化系だとばかり思ってたから、とにかく今は基礎を伸ばしてれば良いかなって」

「そうね。それでその発のことなんだけど、変化系を100%使えるかもしれない事が分かったからといって、焦って作らないようにしなさい。まずは自分の特性を完全に把握することが第一。それから発を考えるのでも決して遅くはないわさ」

「わかつた。今まで通りの修練と、変化系の系統別修行をすれば良いんだね？」

『そういうこと。それじゃあたしもひぐらしあんまり夜更かししないよつてんじなさいな』

「はい！ それじゃ、お休みビスケ！」

『おやすみなさい、ラスク』

プツ、プツ、プツ、

ふう

やっぱビースケに相談して良かつたな。

困ったときはビスケえもん、頼りになる。

それにしても驚いた……。

変化系、か……。

おそらく俺が転生者だつて事が関係してると思つただけど、絶対  
とはいえない。

前世の俺のオーラが変化系だつたとか？

いや、前世の俺からオーラなんて出たこと無かつたし！

一時期、毎口のように燃える方の『燃』をしてたこともあったの  
に、精孔開かなかつたし！

出でたのは腐臭くらいのもんだったよ……？

そもそも転生つてなんなんだろ？……？

な~んて、考へても答へなんて出るはずもなく。

そのへんはまさに神のみぞ知る、だ。

あいにく、俺が転生した時に神様が出てきてあれやこれやと説明してくれたワケじゃないからな……。

元々この体がそういう風に出来ていたつてこともあるかも知れないし。

とにかく！俺には強化系と変化系両方の素質があるつて事が分かった。

ならばひたすら修行あるのみーだな！

## 第6話（後書き）

どうしよう一話が全然進まなくなっちゃった＼（^o^）＼

次は天空闘技場に行きます！多分……

炭酸水を用意するなら、コーラを買つた方が早いと言つことに気付かない主人公。

自分の念系統の事なのに深くは考えない主人公。  
どんどん単純バカになつてゆく……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5351z/>

---

転生者のハンターライフ【習作】

2011年12月21日23時26分発行